

ペンフレンド(四) めぐみ卒業の年

中村アキヤ

「明けましておめでとうございます。

いよいよ学生生活最後の年ですね、楽しい思い出に満ち溢れた年でありますように。

あきら様

青木 めぐみ

昭和三十四年一月元旦」

昨年十二月に行き違ってから二人は逢う機会がなかった。年が改まってめぐみは卒業を数カ月先に控え、父親に紹介された就職先を訪問したり、音楽部のお別れパーティーとか、お見合い写真を準備するとか、いろいろと取り紛れていた。

あきらのも多少気になっていたが、自分から逢いたいなどと連絡するものではない、と思っていた。なにかあればあきらのことだからきつと手紙が来るだろう、もし来ないままでもこの関係が終わってもそれはそれで仕方がないとも思っていた。あきらにはあきらの将来があるのだから、と。

一方あきは、十二月末までに仕上げなければならぬ学生実験に没頭していた。それが終わっても二月の一週目にはじまる期末試験の準備で、動きがつかなかった。めぐみとは昨年十一月に逢って以来入院のお見舞いの手紙がきただけである。

彼女との関係については深く考えたことはなかったが、断片的にいろいろなことが頭には浮かんだ。彼女はもう卒業だ、学生の俺とはもう付き合ってくれまい。それならば別な彼女でも探そうかな、でもめぐみ程いい女の子は見つかるかな？

めぐみから結婚相手が見つかったといってきたら、それを止める権利はないものな。でもいつかめぐみからどこか知らないところへお嫁に行くと知らされた時になって、初めて大事なものを失うと感ずることになるのかな？とも。

めぐみの卒業の年になってからの三ヶ月はあっという間に過ぎ去った。このままで中途半端な彼らの友情は、儚く自然死を迎えてもおかしくはなかった。

そんなときあきららは鹿児島島の指宿から灯台の写真の絵はがきを受け取った。めぐみは学生生活最後の思い出にと、クラスの例の仲間と九州旅行に出かけたのである。めぐみは、あきらとの関係を深刻には考えてはいなかったが、最近音沙汰がないけどどうしたの？などと書くのは気が引けた。だから旅先から軽い気持ちで出す絵はがきなら無難だろうと思ったのだ。

「貴方はもうそろそろ試験が始まる頃ですね。私達のんびり旅行しているのが申し訳ないような気がします。九州といたらさぞ暖かいところだろうと思っておりましたが、北九州の方は東京とかわりなくちよつと当てがはずれました。長崎では雨に降られました。雨に煙る長崎の町。お蝶夫人ゆかりの地であるグラバー邸の素晴らしいお庭から眺めた時は、思わず感嘆の声をあげてしまいました。

今日は九州南端の指宿に参りましたが、さすがに南国らしい日差しにほっとしました。少しも分からない鹿児島弁にまごつきながらも、その豊かな人情には心温まる想いがいたします。(私らしくない真面目なお手紙になりましたが、つい地が出たものですからあしからず)。しっかり勉強して落第しないように(ごめんなさい)。

中山 あきら様

指宿にて、青木 めぐみ 三月五日」

めぐみは仲間と離れて一人で夕暮れの海岸を散歩した。夕日に沈む開聞岳のシルエツトがとても綺麗で、打ち寄せる波の一つ一つが金色に映えていた。あきらと二人でこんな海を見ることが出来たら良かったなと思った。かわいらしい貝殻を一つ拾った頃には、陽は既に水平線に没して遠い街のあたりが滲んでみえた。

正月以来あきらからの連絡はなかった。やはり卒業となると彼も私を敬遠するのかな？と思った。それならそれで一度位さよならを云う機会があってもいいな、別れるならロマンティックにやりたいな、とも思った。

いよいよめぐみの学窓を旅立つ日がきた。学生時代は夢のように過ぎ去ってしまった。仲の良かった仲間とも、音楽部の後輩とも再会を約して努めて明るく

別れた。それから一週間、自分の部屋を片付けたり、解放感に浸って映画をみたり、ちよつと化粧品品の宣伝文を読んだりして、規則正しい生活のテンポが崩れ掛かっていた。あきらのことは無理に考えまいとしていた。

何時の間にか日が延びて黄昏時が美しい季節になっていた。こんな時あきらと散歩したらいいだろうな、とめぐみは考えるのであった。

そんなめぐみの許に雪の妙高山の絵はがきが飛び込んできた。試験明けに早速スキーに出かけたあきらからである。

「一メートル余りの積雪があるとは云え、ふくらみつつある木の芽やゲレンデに吹く風にはさすがに春の気配が感ぜられます。山積した宿題を丸四日間、試験の時にもしなかつたような努力をして、なんとか片をつけてやってきました。

顔を真っ黒にしながら滑りかつ転ぶこの快感は、間もなく学窓を離れる貴女にはもう味わうことができないのかと思うと、ちよつとだけ気の毒な気がします。今回はハシゴスキーで明日(二十一日)には白馬の八方尾根に宿替えする予定です。

話は違いますが、二十六日のN響にいらっしやるなら夕食を済ませていらっしやいませんか。いつも食事に時間がかかってツマラナイから。ではお元気で。

青木 めぐみ様

燕温泉にて、中山 あきら 三月二十一日」

食事の時間を惜しんで話したいというのである。あきらとの関係が切れても仕方がないと思っっているくせに、めぐみはこの絵葉書を貰ってなぜか胸のつかえがとれたようなほつとした感じになった。だが、めぐみの返事は相変わらず、都合が悪いという断りの返事だった。

「スキー場からのお便りありがとうございます。さぞ楽しい日々をお過ごしになったことでしょうね。少々しゃくにさわります。遊ぶためには涙ぐましい努力をするものと感心したり呆れたりしています。

学校を出るともうスキーをする機会などないだろうと同情してくださっているらしいけれどこれきりでスキーをやめる気はありません。これからも何分よろしく。

さて、二十六日のN響のことですが、五時から大学の謝恩会があるのでどうも

行けそうにありません。指揮者が変わるので是非行きたいと思っていたので残念です。もしいらしたら私の分までよく聴いてきて下さい。N響は四月からも又継続するつもりです。今回はお逢いできなくて残念ですが致し方ありません。取り急ぎご連絡まで。かしこ。

めぐみ 三月二十七日

めぐみはアメリカ銀行に就職が内定していた。ところが先方の退職予定者が都合で退職せずに済んだ上、新任の支配人が要員の増加には消極的で、内定は取り消されていなかったが、いつから本採用になるか目処がつかない状態であった。めぐみはこのまま家にいるよりはと、カメラの小西六にアルバイト先を見つけていた。

四月に入りあきは新学期、めぐみは新しい職場で緊張した日々を送っていた。四月十日には皇太子のご成婚のパレードがあり、美智子妃殿下が時の話題をひとり締めしていた。

東大構内では銀杏が緑の芽を吹き始め、正門から安田講堂を望む法文経の各学部の建物に挟まれた道路は、五月祭の催し物の立て看板でいっぱいになっていた。

あきは恒例の大学の五月祭のプログラムを送り、自分の研究発表結果が展示されるので是非来て欲しいことを告げた。そして五月祭の最終日五月三十一日に催されるダンスパーティーにめぐみを誘った。

「記念祭のプロありがとうございます。ちょっとでもいいから貴方の命がけの苦闘の成果を拝見できたらと思います。仕事の都合で五時半頃でないと帰れないので無理でしょうね。

さてこれからお詫びなのですが、怒らないで聞いて下さい。三十一日のパーティーに行けなくなってしまうました。小西六で二十六日から一週間、駐留軍の家族を対象にしたカメラの展示即売会をするとかで、是非手伝ってくれとのことなのです。おことわりしようと思ったのですが適当な人がいなくて困っているとの事なので引き受けてしまいました。勤務は夜八時までとのこと、そんなわけで三十一日は駄目そうです。

本当に今頃になって申し訳ないのですがどうぞお許し下さい。この埋め合わせはきつとしますからお怒りにならないでね。

見本市も済んで引き続きカメラ祭に参加していますが、昨日迄の混雑に比べて今日は全くうそのような静けさで何となくわびしいような気さえします。

今日はお客様になって他社のカメラをひやかして来ましたが、欲目ではなく小西六の今度出る一眼レフはチョットとしたものだと思います。カメラにはだいぶくわしくなりましたが、まだ器械に弱い所を暴露してしまいます。二十日間もいるといいかげん顔が広くなって他のカメラ屋さん達とも顔馴染みになり、特別製のパンフレットなど貰ってきたり、いろいろ面白いこともあります。又お目にかかっているいろいろお話しましょう。

とり急ぎお詫びまで。本当にごめん下さい。ごきげんよう。

あきら様

めぐみ

五月二十四日

あきらはめぐみを誘う度に断られるので少々癪にさわってきた。めぐみには誰か男友達がいるのだろうと思った。居て当然だと思った。社会人になっためぐみに何時までも拘泥するのはいい加減にしよう、と。このままこんな関係が続けることは土台無理なのかも知れない、と。やはり縁がないのかな？とも。

「五月祭のパーティーに誘った女の子に振られちゃったよ」

あきらはクラスメートの曾我に自嘲気味に打ち明けた。曾我は都立大付属高校の出身でなぜかたくさんのガールフレンドがいた。もともと曾我は背も高く髪がやや縮じれ、瞳もやや緑がかった色で、あきらよりは格段にモテる要素が多かった。

「中山、君は女友達は一人しかいないのか？今から一人に決めてしまうのは危険だよ。野球のピッチャーを見ろよ。ピッチングスタッフっていうものがあるだろ？主戦投手が駄目なら次の選手、それが駄目ならまた次の選手を用意しておかなければ。女友達もエース、ブース、シースの三人ぐらいは用意して置かなければ」

「なるほど」と、あきらは思った。

「めぐみは今の自分には間違はなくエースだが、エースが駄目ならブースか、よし今回は林美佐子を誘ってやろう」

林美佐子は青山学院大の3年生だった。目がクリツとして顔が小さく抜群のスタイルをしていた。ただ高めのハイヒールを履くとあきらと同じ位の背の高さになるのであきらには余り高いヒールの靴は履いて欲しくなかった。

彼女との出会いは神宮球場だった。当時は六大学野球の全盛時代で、明大の近藤（和）をはじめ立教の長嶋、本屋敷、杉浦などの名選手が輩出していた。

東大には吉田という好投手がいて六大学野球でたまに勝つときがあった。確かにこのシーズンは明治が不調で島岡監督がいくら督励しても勝てず、東大はもしかしたら最下位を脱出できる可能性があった。

あきらはクラスメートの大原たけしと明大戦に行く事になっていた。大原は青山学院生の従姉妹を連れていっていいかとあきらに聞いた。

「俺の従姉妹は美人だぞ。でも実をいうと俺も余り付き合ったことはないんだ。今度神宮の野球に連れて行くのがはじめてなんだ」

当日になって大原は急な用事で野球に行けなくなった。そこで従姉妹に電話して三塁側の切符売り場であきらと会う段取りをしてくれたのだった。あきは、約束通り赤い表紙の本を持っている美佐子を見るまではどんな女の子と会うのかちよつと心配だった。

二人は混んでいる内野席をさけて外野の芝生の上に並んで座った。その日東大は惨敗したが、それ以来あきは大原に黙ってときどき美佐子に会っていた。

美佐子はスポーツ万能らしくダンスも上手かった。ジルバをクルクル踊るときなどは、あまりのステップの軽さに周りの人が踊るのを忘れて見とれる位であった。でもあきらがめぐみと付き合うようになってからは、美佐子に声をかける頻度は極端に減っていた。五月三十一日は美佐子も都合が悪く、結局あきらにはパーティには行けなかった。

めぐみは自分が行きそこねたダンスパーティが気になっていた。あきらからはその後なんの連絡もなかった。忙しかったカメラの展示会もおわりに近づいたので、それとなくあきらの様子を打診する手紙を出すことにした。

「この間は本当にごめんなさいね。パーティはいかがでしたか？私の方はあまり柄の良くない輩を相手にしながら、今頃貴方はさぞ楽しんでいるだろうなと

口惜しがっております。

夜はいつも九時までいなくてはいけないのでちよつといやになります。でもお客様はいつも少なくておまけにカメラは金額がはるのでなかなか売れません。おかげでいつも暇で隣近所のブースへ遊びにいたり、東芝のブースへステレオを聞きにいたりしています。こんなことをしてお給料をもらっては全く申し訳ないような気がします。ここも三日までの予定でしたが四日間延長して七日の日曜日迄となりました。十時間あまりもガレージの様などころに閉じこめられているといいかげんいやになります。でもこんな経験もしておいて悪くはないと思っています。外人ばかり相手をしていると日本人が一番いいと思います。ただ、心臓は強くなりました。(これ以上強くなるとどうなることかなんて思っているのでしょうか?)

七日過ぎましたらこの間の埋め合わせしようと思っております。ではまた、ごきげんよう。

中山 あきら 様

青木 めぐみ 六月四日

めぐみはあきらから、一緒にパーティに行けなかったので残念だった旨の手紙を受けとった。いつもとは違う投げやりな文章で、あきらの心境の変化が窺えるものだったので、あわてて言い訳の手紙を書いた。

「毎日うつとうしい日が続きます。私もこの七日でやっと仕事から解放されやれやれという所です。気が張っていたせいかこれ迄あまり感じなかったのに、今頃になって疲れが出てもっぱら眠りをむさぼっています。

お手紙拝見して貴方がそんなにもがっかりなさっていたのかと申し訳なく思っています。いつも不運な周り合わせになってしまいました(勿論私にとつてもよ)これは全く巡り合せ以外の何でもなかったのですから口惜しがったり怒ったりなさらないでね。

今度は大丈夫でしょう。土曜日の二時に例のところですね。なんだか恐そうだけとお手柔らかにお願いします。ではお会いすることを楽しみに。

ごきげんよう

めぐみ 六月十一日

走り梅雨の土曜日。ブルーの半袖セーターと白のタイトスカート姿のめぐみ

京駅か西銀座のあたりでお会いしたらいいと思います。

今のところ私の方はいつでもよろしいですから貴方のご都合の良い日にお決り下さい。

建替えのための家の取り壊しも、もうしばらく延びるらしいのでまだ当分は今のところ（鎌倉）にあります。勤務先の電話番号をお教えしておきますからもし何でしたらご利用下さい。もつともお手紙の方が嬉しいけれど…。云い忘れましたけれど所属は庶務部庶務課です。

ではどうぞしっかり勉強なさって素晴らしい成績をおとりになりますように。お元気で、ごきげんよう。

中山 あきら様

めぐみ 七月四日

あきららは中間試験終了後、東大のクラスメートの曾我と北アルプスの槍・穂高連峰の縦走にチャレンジする。めぐみは新宿駅まで見送りにくる。あきららは翌日から上高地で仕入れた絵はがきに五日連続の手紙を書く。

「心のこもった手紙、NO1 七月二十一日 晴

昨夜はわざわざありがとうございました。戴いたバナナ美味しく食べました。貴女のペイデイを狙って出発日を決めた訳ではありませんが、結局は最初の給料のうわまえをはねたみたいで恐縮しています。

松本から二時間余りバスに揺られて上高地に着き、すぐに五時間の行程を歩いたのですが、睡眠不足と空腹でいながら、食欲がないという普段の僕にはみられない現象が起こり、第一日目からクタクタになってしまいました。

こんな辛い思いをするなら東京で誰かさんとダンスでもしていればよかったと悔やまれた次第です。しかし、快晴に恵まれた上高地は梓川の清流、緑一色の柳の木立、そして雪溪の点在する穂高連峰など只々素晴らしいの一語に尽き、こんな景色を見たことのない誰かさんにチョッピリ同情したわけです。明日は天気さえ良ければ槍ヶ岳に登ります」

「同じ様な手紙，NO2 七月二十二日 風雨、気温低し

ものすごい雨と霧が窓外に渦巻いています。垂直距離二千メートル、時間にして九・五時間、びしょぬれで震えながらとうとう歩き通してしまいました。

槍ヶ岳山頂直下の殺生小屋の二段式ベッドの上段、湿ったフトンの中でこれを書いていきます。明日雨の場合はこの小屋に沈黙しても、今回は多年の念願である穂高への縦走をやってやろうというしぶとい魂胆です。殺風景なこの小屋では貴女へ手紙を書く事位がせめてもの慰めです。

もう眠いからこれで、おやすみなさい」

「雨男からの手紙，NO3 七月二十三日 曇時々雨

今朝はひどいガスでした。昨夜は遅くなつて雨も上がり、雲も切れてきれいな月が雪渓に映えて本日の晴天を期待させたのですが……。仕方なく一日中殺生小屋に停滞、全く殺生な話です。パートナーの曾我と二人でトランプをしたり、山の歌を唄ったり暇を潰すのに一苦労。

人といれば山を恋い、山にいれば人を恋う（これは僕がつくった言葉ではないが）全く東京に帰りたくありません。午後雨の合間をみて槍の山頂に遊びに行つたところ急に雨が降り出し又びしょ濡れ。昨夜濡れ物を身体に巻き付け体温で乾かしたのですが、すっかり無に帰しました。

パートナーは情熱家なので濡れ物がすぐ乾くのには、僕は冷血動物なのでしうか？ 明日こそは好天を！ 我が切なる望みをかなえ給え」

「暴風雨より強い男からの手紙，NO4 七月二十四日 セミ暴風雨

今朝も昨日と同様に濃いガスがかかり、おまけに強風が吹いていました。がとにかく出発しました。三千メートルの稜線を風に飛ばされないように進む中に雨が降り出し悲惨な様相を呈し出しました。

西側は目の眩むような（といってもガスのため谷底は見えないのですが）断崖、濡れた岩は滑り易く、突風に煽られればしばバランスを崩し、全く命の縮む思いを七時間あまり耐え抜いて、やつとの思いで穂高山荘に着きました。途中どこかの山岳部の人が急な雪渓でスリップして、三百メートル下で危うく岩に引っかかって止まるというショッキングな場面に遭遇して、以後足が震えて困りました。もう乾いた衣類は殆どなく人間ドライヤーの友人に乾かして貰っています。日本一凄いとされるこの縦走をこの悪条件下でやり遂げたこの私をお世辞でも良いから誉めてやってください。明日上高地に降りたらこれまでの手紙まとめて投函します。以上かつてな事書きましたがサヨナラ。

PS 二十八日頃帰る予定、そしたらダンスにでも行きませんか？」

「絶景の三千メートル地点で書いた手紙、付録 七月二十五日 快晴

昨日の嵐は嘘のように、今日は素晴らしい天気です。残月が岸壁を照らしている中に歩き始め、今現在、槍、穂高連山が目前に大パノラマを展開している前穂高岳の頂上にいます。上高地が足下に箱庭のようにみえます。

今日は早起きして時間的に余裕があり。しかも思いがけない程のこの天気なので、のんびりとパートナーの曾我はスケッチ、僕はこの手紙を書いています。

昨日ガスのため谷底がみえないのでスタスタ歩いた稜線が、今日ここから見ると両側が切り立つような絶壁のナイフリッジだった事を知り、良くもまあ無事にと我ながら感心しています。ああこの景色を貴女にも見せてあげたい。せいぜい僕の撮った写真で我慢して下さい。昨日の手紙でもうおしまいになしようと思ったのですが、今日は余り素晴らしいのでこの手紙は付録で書きました。では東京で。前穂高にて、午前八時。」

「エピローグ（パートナー曾我君よりの手紙） 七月二十五日

まず始めにお近づきの挨拶から、初めまして。この山行、初日は晴れたものの二日目からぐずり出し、雨男の祟りまさに恐るべし、という所。この雨の中で小屋に着くや否やペンと絵はがきに取り組むN氏はまさに情熱家でありました。

これに毎日煽られて被害甚大。おまけに彼は手紙を書き終わるとすぐにグウ寝てしまうので話し相手もなく、独り者の辛さが身に沁み次第。

以上、ことの真偽は彼より直接お確かめ下さい。乱筆にて（彼の万年筆なもので）失礼しました。曾我」

めぐみはこの連続の手紙を貰って嬉しかった。濡れそびれ疲れた身体で山小屋に着くなり毎日書いてくれたあきらの気持ちを愛おしく思った。友人の添え書きを読んで、あきらは自分のことを友人に話していることを知った。

なにか遠くに見えかくれしていたあきらのめぐみへの愛情が急に身近に感ぜられた。でも、こんなに深入りしているのかしら？と武蔵小金井の自宅の窓から夏の夕焼け空を見上げながらめぐみは自問自答した。夕日をバックにした富士

山のシルエットがいつもより近くに見えた。

八月七日に二人は久しぶりに会った。上高地からの連続絵葉書レターをもらったあとなのでめぐみは少し面映かったが、あきはとくべつな素振りを示さなかった。

翌日あきは前野を含めた戸山高校の仲間と今度は烏帽子岳、燕岳から槍ヶ岳へのいわゆるアルプス銀座の縦走にでかける。

今年一橋大を卒業するはずだった戸山高時代からの親友前野は二月の期末試験の最後の教科の前夜に急性肺炎になり、単位が足りず学内留年することになっていた。就職がいやでわざと落第したのだろうとみんなから、からかわれていた。

今回は、山小屋を使わず中田の持っているテントを使用するという計画で出発した。あきは山に入る前日に葛温泉から絵はがきを、帰宅してからすぐに封書の手紙をめぐみ宛てに出した。

「昨夜全然眠れないままいつの間にか出発の朝になってしまい、腫れぼったい眼をして汽車とバスを乗り継いで何となく高瀬川畔の当地に着きました。ひと風呂浴びて中田からこの絵はがきを貰って書いています。

日没とともに山の涼気が急に身に沁みて、昨夜会って戴いたことなどまるで嘘みたいに遠くへ来てしまったことに気がつき、今日一日が夢のように過ぎてしまったことに驚いています。青春なんてあとで振り返ればほんの一瞬なのかも知れませんか。

明日からまたテクテク…。台風がくるとかちよつと気がかりですが、靴ずれをこさえて十日頃帰宅という次第。帰ったらまたヨロシク。ではお元気で。

めぐみ様

葛温泉にて

中山 あきら

八月八日

「めぐみさん。

台風が過ぎてからめつきりと涼しくなりましたが、以来憂鬱なお天気が続いて身体にカビが生えてくるような気分です。今回の山行はなんとか目的は達したのですが、終始台風に追いまくられ、途中の山小屋に着くたびに台風の位置、

進路、これからの山の天気を聞いては次の計画をたてるといった具合でした。

おまけにテントを持っていったのは大失敗で、ただでさえ重い荷物の他に、寝袋とか食糧、コップ、フェルに飯盒、それに石川のやつは寝巻きまで持って来るんだから全く頭にきます。初日の烏帽子沢の登りは北アではきつくて有名な登攀ルートで、稜線にでるまで息をつかせぬ登りの連続です。

おまけに一時間ほど登ってから途中の沢で水を補給するのを忘れていたことに気が付き、僕と中田の二人が皆の水筒を集めて折角登ってきた急坂を駆け降り、大急ぎで水を汲んで帰ってきてみると、その間に他のものは、少しは高度を稼いでいると思ったのに、なんと同じ場所でノンビリとニギリメシを食べているのです。

他人の苦労をなんとも思わない薄情な友達を持ったことを反省しながら僕らもニギリメシを食べました。

槍ヶ岳に着いた時は小雨模様でしたが、その夜から明日は大荒れになるとの予報で山頂に立って感激に酔う暇はありませんでした。もつとも僕にとっては誰かさんに会って戴いた方がはるかに感激なのですが（本当なんですよ）。上高地から下山する日は朝から大雨で皆全身ズブ濡れ、道路が決壊したとかでバスがなかなか来ないため濡れた服で四時間もバスを待つ羽目に。それでも感心に風邪もひかずに帰って来ました。

帰宅してみればまだ一カ月も夏休みがあるし全く身を持って余してしまいます。そう何回も山に行くのは体力的にも経済的にも限度がありますし、勉強するとすぐに身体に変調をきたすという悲しい宿命を背負った僕は、就職先も決まった現在、何の目標もなく寝坊しては高校野球のTVをみて時間を潰す状態です。

こんな僕にカツを入れる意味からも貴女の都合の良いときに逢って戴きたいのです。お勤めで忙しい貴女にわがままを押しつけて申し訳ないのですが、貴女なら聞いて下さると思つて、電話すれば手っとり早いのですが、お返事待つのが楽しみなのであえて拙文を綴った次第です。急に涼しくなりましたから寝冷えをしないように。 さようなら。

めぐみ様

あきら拝

八月十三日

あきらの手紙はいつでも積極的で、めぐみは夏山の手紙以来完全に押しまくられているように感じた。このままなし崩しでは上手くいかない。少しはケジメをつけなくては、と思った。逢えばあったで楽しく時間があつという間に過ぎ、別れるのが辛くなる。あきらは夜何時まででも良いというがめぐみは両親への手前、そんなに遅くまでは一緒にはいらなかった。

この頃はおたがいの感情が煮詰まって、熱っぽい瞳と戸惑う瞳が交錯する場面がしばしばあった。切ない雰囲気は、あきらからめぐみに伝染し、そんなときあきらにはめぐみが話しかけると、震える瞳がなにごとか語りかけて来るような気がした。ただめぐみは手紙の中では相変わらず憎まれ口を叩いていた。

「台風以来すっかり秋らしくなりました。冷房のない勤め先なので涼しいのはとても有り難いのですが、今年の夏ももう逝くのかと思うとそぞろ侘びしさを感じます。柄にもないことを云うなつて？（どうせそうですよ!）」

山からお帰りになったらお電話があるかなと思っていましたのでどうしたのかとちよつと心配でしたが、無事にお帰りの由、安心しました。でも相変わらずお天気には恵まれていないようでお気の毒ですがちよつとばかりいい気味でもあります。（ごめんなさい、でもわかるでしょう?）」

私のほうは改築のため家を壊され目下のところ家無しの状態です。そんなわけで毎日鎌倉の親戚の家から通ったり、遅くなる時は小金井のアパートへ帰ったりしています。夕暮れ時の海や、滅多に見られませんが早朝の海はなかなかロマンティックでよいものですが、自分の家でないから何かと不自由もあり、気がねもするので早く自分の家が欲しいとつくづく思います。

貴方の暇つぶしのお相手に喜んでなつてあげたいと思いますが、そんな事情でお会いしてもゆっくりしてられないのではないかと心配です。それでもよろしかったら二十二日の金曜日に西銀座五時半。ご都合の悪い時はご一報ください。最後の夏休みを思いきりエンジョイなさいます様に。ごきげんよう。

あきら様

めぐみ

八月十七日」

続く（一一、六二六語）